

人間をともに生きる

二〇二〇年六月二十六日

高田教区教化委員会本部長

第一組 圓照寺住職 藤島 直

「世間の愚かな人々は、おのれ自身、老いるもの・病むもの・死ぬものであり、老いること・病むこと・死ぬことを避けられぬ身でありながら、他人の老い・病い・死をみてあざけったり厭いとったりしている。私自身もまた老いるもの・病むもの・死ぬものであり、老いること・病むこと・死ぬことを避けられぬ身でありながら、他人の老い・病い・死をみてあざけったり厭いとったりすべきであろうか。これは正しいことではない。」

〔阿含経〕・大谷派教師養成テキスト『大乘の仏道』旧版より〕

コロナウイルスに感染された方や縁者への差別、医療従事者やその家族への差別が問題になっていきます。思い出すのは、私が大谷派僧侶になろうとしたときに、教科書に載っていた前述のお釈迦しやくかさまのみ教えです。

どうやら、時代社会を問わず、人間は不都合なことを誰かのせいにする事で、安心を得ようとするようです。しかも、押し付けた責任を、その人の自己責任にすりかえることで、自らを免罪めんざいするのです。しかし、それは正しいことはありません。老・病・死に苦しむ人は、如来にょらいから等しく慈悲じひを向けられている人間であり、ともなる業ごうを生きる同朋どうぼうです。差別は断じて許されません。

人間をともし生きるくコロナ禍中での念仏生活に思うく

このコロナ禍の中、アマビエという妖怪がブームだそうです。疫病の流行を予言するといふその妖怪の絵をもっていると、疫病除けになるとか、ならないとか…。対して、仏教、特に真宗は、そういった類の御利益とは無縁の宗教です。他宗にみられるような、世間の安寧のために加持祈禱をすることも、自らが超越者になるために苦行をすることもありません。親鸞聖人が依りどころにされたのは、老・病・死を否定しない仏教の前提に立って、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひと」の言葉一つです。

感染防止対策と自粛の影響で寺の予定表はずいぶんヒマになりました。存外、いつものように、毎朝の勤行に始まり作務で過ぎていく日常。不安に囲われるかたちで小さくなった私の世界から、メディア越しに見えてくる私たちの大きな世界。病と死に害されるのは健康だけではないようです。混乱する政治、疲弊していく経済、開いていく一方の格差、理不尽な差別、心ない言葉。そんな現実に出会う度、宗教とは何のために存在するのかを問わずにはいられません。

しかし、ウイルスは罹患させる人を信仰で選んだりしません。人間の都合など、おかまなしの厄災の前では、ある意味、宗教などまつたく役に立たないのです。歴史を振り返っても、病と死が露骨に突き付けられたとき、あきらかになるのは、私たち人間と私たちの社会が信じていることが意外に「もろい」という事実です。

しかし、親鸞聖人は「もろい」ことを「絶対」だと信じようとする愚かさや弱さこそ、私たちの本質なのだときららかにされました。まがりなりにも真宗坊主である私に、なにができるかを自問したところで、出てくる答えは「ただ念仏」以外にありません。寺の活動が制限され、はからずも「ただ念仏」しか残らなかつた生活があきらかにしたのは、他ならぬ私自身が自我の枠にはめ込んで「絶対」だと信じていたことの「もろさ」と、私が「たすける」側ではなく「たすけられる」側の人間だという事実でした。

その事実に立った時、人間の愚かさや弱さこそ、人間を愛おしく、尊い存在だと感じさせてくれます。人間は一人では生きていけないのです。むしろ、人間は一人で生きてはいけません。なぜなら、人間は、自他の愚かさや弱さを認め、互いにたすけられあわなければ、生きていけないからです。誰かを差別し、疎外して人間は生きられないのです。

確かに、一面、宗教は病と死の脅威の前に無力です。しかし、人間が人間として生きる道を見失ったら、病を克服したとしても、生きること自体がむなしなものになってしまうのではないのでしょうか。